論文審査の結果の要旨

氏名：檜　垣　時　夫
専攻分野の名称：博士（医学）
論文題名：Clinical correspondence to hepatocellular carcinoma-related lesions with atypical radiological pattern
(非特異的な画像パターンを示す肝細胞癌関連病変への臨床対応)

審査委員：（主 査）　教授　櫻　井　裕　幸
（副 査）　教授　逸　見　明　博　　教授　石　井　敬　基
教授　越　永　從　道

本研究は、画像的に非特異的な所見を示す肝細胞癌関連病変に対する実地臨床での取り扱い（切除すべきかどうか）について考察した後方視的観察研究である。肝細胞癌に特異的な画像所見は CT/MRI 検査の肝動脈相で腫瘍濃染かつ門脈相で門脈血流の欠損であるが、その発がん過程（前がん病変）では非特異的所見を呈しうる。本研究では画像的に非特異的所見を呈した肝細胞癌関連病変切除症例 72 例を対象とし、その臨床病理学的事項から切除の妥当性について検討されている。非特異的画像所見を呈した病変 72 例のうち 39 例(54%)が肝細胞癌(Classical HCC)であり、これを Group1、残りの 33 例(46%)は早期肝細胞癌、前癌・境界病変、良性腫瘍であり、これを Group2 として、肝細胞癌(Classical HCC)に対するリスク因子として術前血清 AFP 値が示された（多重ロジスティック回帰分析）。ROC 解析を用いて、術前血清 AFP 値のカットオフ値(36.4ng/mL)を定め、その血清 AFP のカットオフ値による２群間比較において、全生存期間および無再発生存期間は統計学的に有意差を認めていた。結論として、非特異的な画像所見を呈する肝細胞癌関連病変では、術前血清 AFP 値がカットオフ値 36.4ng/mL 未満の場合には経過観察することも可能であるということが示された。
本研究は、画像上の非特異的所見を示す肝細胞癌関連病変に対する治療方針を提唱する有用な研究である。
よって、本論文は博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以　　上

平成２９年１０月２５日